

# 初志を胸に『榎本与助の熱き思い』

## ～県議初当選まで 生誕から41年間 の足跡～

10年間、おおぜいの人びとの支えにより、三度の選挙を戦い抜いた末の青年県議の誕生。

手造り選挙の勝利をみんなと涙で分かち合った41歳の『榎本与助』・・・

しかし、若い政治家、榎本与助のこれまでのあゆみは必ずしも平坦ではない。

敗戦直後の昭和20年10月17日、現在の津久井郡相模湖町与瀬で産声をあげた。

3才の時、トラックの運転手であった父憲吉の仕事の都合で相模原に移転。

その後、裕福ということからは、ほど遠い家であったが、3歳年上の姉とともに両親の愛情に育まれながら、昭和27年小学校に入学。

しかし、この頃から母時系ときえの身体は病魔びょうまにおかされはじめ、病やまいがちな日々が続いた。

そして昭和29年、初夏を迎えた途端とたんに父と中学1年の姉、それに小学校3年で8歳の少年に別れを惜しみながら、母時系はこの世を去った。・・・まさに無情という他はない。

それでも少年は、近所のおばさんやおじさん、友達にも恵まれ、明るく育ち昭和33年中学に進学。・・・中学時代の3年間は、スポーツと家計たすを助けるためのアルバイトに明け暮れた。

朝は牛乳配達、夏休みは毎日「朝・昼・夕」と3回、ラッパを吹きながら豆腐とうふを売って廻った。

冬休みもアルバイトに精を出した。・・・特に、中学1年の夏に始めた「豆腐売り」は、当時のアルバイトとしては珍めづらしく周囲の注目まど的であった。そしてこの「豆腐売り」を通して少年は人の情けなさを強く知った。

まだ大人用自転車のペダルに足が十分届かない時分である。雨の日などは砂利道じゃりみちにハンドルをとられて幾度か転んで豆腐をぶちまけてしまった。グチャグチャになつた「豆腐」はどうにも

ならず、涙ながらに困惑している少年の姿を見て、近所のおばさんが壊れて泥んこになった

「豆腐」を全部買ってくれた。・・・当時、豆腐1丁15円、各家庭では1円・2円を丹念たんねん

に家計簿かけいぼに付けていた頃のことである。・・・

人の情け、「これがある以上、いかなる逆境ぎゃつきょうに立っても決して挫けちゃいけない」と、これまでも辛い時つら、苦しいときおきな、いつも幼い頃おきなのことを思い浮かべ、自分自身を奮ふるい立たせた。

昭和36年、中学を卒業と同時に就職、社会人としての第一歩を踏み出した。

その後、十指じっしに余るほど職しよくを替え、昭和42年4月海上自衛隊を除隊し、東京へ。

※裏面に続く

この時榎本青年21歳、都立新宿高校定時制の生徒として、新たなスタート台に立つ。・・・この高校生活も牛乳配達を唯一の収入源として頑張った。青雲の志しを抱いての出発とはいえず、先行きは海とも山とも覚束ない極めて不安定な時期であった。

その後、次第に政治活動に足を踏み入れ、昭和47年、26歳で専修大学に進むが中退をするまでの3年間、その殆どを政治活動に費やした。

この時期、深夜と年老いた父のことや同級生のこと、あるいは自分の将来に思いを馳せる時、如何に天下国家を論じようとも、そこはかたない不安に陥ることも度々であったという。

将来、必ず政治で身を立てる、「心に刻んだ人の恩に報いるためにも」と、心密かに誓っても『地盤・看板・かばん』が政治家への必要条件といわれた時代である、何一つ無い身では空しさが募るばかりであった。・・・長いこと男手ひとつで苦労して来た「おやじ」のもとへ帰り、親孝行の真似事でもしなければ・・・繰り返し、繰り返し考え悩んだ。

昭和49年9月、悩みながらも謳歌した学生生活にピリオドを打ち、政治活動に向けての準備に取り掛かる。

昭和50年8月、衆議院へ出馬準備をしていた戸沢政方先生の秘書として、生まれ故郷の津久井郡を舞台に本格的な政治活動を展開することになる。

その後、昭和54年と58年の二度にわたり津久井郡から県議選に出馬するが、いずれも苦杯。

榎本青年にとって津久井郡相模湖町が生まれ故郷とはいえ、父憲吉は山形県、母時彥は岐阜県の出身であり、身内といえば城山町に居る姉夫婦だけである。

それでも昭和59年3月、戸沢政方先生の理解と多くの方々の全面的な援助により、現在地に事務所を構え、政治活動に全身全霊を傾けることになる。

特に当選するまでの3年間の生活費と活動費の全てが、支援者による尊い浄財(献金)により賄われるという、極めて特異なケースを辿っている。

榎本青年は、昭和62年4月、数々の思いを胸に秘め、後の無い三度目の県議選に挑戦。大勢の人の情を一身に受けての選挙戦の結果、大方の下馬評を覆して劇的な勝利。

・・・ただ、この1ヶ月半ほど前に、父憲吉は83歳で母のもとへ逝っていた。

おそらく、幼い頃の娘と息子を不憫と思いつつも、黙々と生活に取り組んで来た親父。1坪の財産も蓄えることのなかった親父、真正直で無口、人の良過ぎた親父。・・・

目に付くものは何も残せなかった親父だけれど、自らの全てを息子の勝利のために捧げてくれたのではと、榎本青年には思えた。

昭和62年(1987年)4月・初当選の日